

【第三章】天皇制と「民主主義」…メディア天皇制の問題②

「民主主義」という名の天皇制…天皇は一体なにをする人ぞ

中村ななこ

今回のテキスト「情報支配——天皇制というイデオロギー」「装置」(軌跡社、一九九〇年)という本は、裕仁が死んだ年の暮れに行われた「(象徴天皇制を問う)全国フォーラム」における第4分科会「マスメディアは朕のもの?」の内容をまとめたものですので、前回の報告より以降からの時代状況からお話しようと思います。

露出する裕仁天皇

ミッチーブームに象徴されているように、メディアによる「象徴天皇制」がいよいよ本格的にはじまるわけですが、裕仁天皇は終戦直後から次々と自分の姿を見せていきました。まずは「全国巡幸」です。一九四六年から八年半にわたって沖繩を除く全都道府県、一四一か所をまわります。そして、全国国民体育大会。これも四六年からはじまりますが、四八年に天皇杯・皇后杯というのがはじまり、四九年の第四回大会から天皇と皇后が開会式に出席するようになります。国体は天皇だけでなく、皇族もいろいろな種目を観戦します。また、競技をみるだけではなく、その土地の施設を訪問したり、視察と称しているいろいろまわっています。

少しそれですけど、一九六四年に東京オリンピックが開かれ、その際

には天皇が開会を宣言して、「第二次世界大戦後の荒廃から一九九年を経て立ち直り復興を遂げた後、取り組む国家的イベントであり、再び主要先進国として国際社会に復帰するシンボリックな意味を持った」というふうに報道されます。このオリンピックのあとにパラリンピックが開かれますが、それを踏襲するように、翌年の秋季国体のあとに「全国障害者スポーツ大会」というのが開催されるようになりました。これは天皇ではなくて当時の皇太子アキヒトとミチコが力をいれたもので、障害者への「慈愛」をみせるイベントとしてあります。

それから全国植樹祭というものもあります。一九五〇年から毎年行われています。こういった行事で全国津々浦々に天皇は出没し、各自治体は歓迎行事、それは職員や子どもたちの動員、警備、お金など、問題は大きいのですが、とにかくそうやってナマ天皇の姿を見せる、ということとは着々とやっていった。それはニュースや新聞などの報道によっても大衆に見せていくわけですね。国体のときに地方に行くと、その地方新聞が大々的にとりあげているのがよくわかります。おそらく地元テレビ局なども報道がたくさんあるのだと思います。

また園遊会は今は春と秋に年二回行われています。一九五三年から始められました。限られた人ではありますが、約二〇〇〇人も招待されるんですね。テレビなどで報道があるのは、金メダリストや芸能人、そ

ういう各界功労者というところだけではなく自治体の首長ですとか、衆参両院議長、各自自治体の首長や市町村レベルでの市長、町村長が夫婦そろっての出席になるそうです。

次に外遊です。一九七一年には戦後初めてヨーロッパ七か国を訪問しました。デンマークやベルギー、フランスではさしたる問題もなかったけど、イギリスとオランダでは抗議行動が相次ぎ、卵をぶつけられたり糞尿ビンをなげつけられたりしました。

一九七五年にはアメリカ訪問。このときのアメリカ人記者のインタビューを契機に、日本でも外人記者クラブで記者会見を初めて行い、そのときに「戦争責任について」言葉の「アヤ」「原爆はしかたがなかった」といった問題発言があり、自由に発言させてはまずいということになり、それ以降の記者会見は、事前に質問内容の検閲があり、回答を用意してくるような記者会見になってしまいました。この帰国直後の記者会見というのは、「You Tube」で見ることが出来ます。裕仁はヨーロッパ七か国とアメリカには行きましたが、その際の現地での抗議行動もありましたし、戦争責任問題をおざなりにしているために、これ以降は外国に行かれました。そしてその代わりに皇太子が行くことになるわけです。アキヒトは皇太子時代、一九五三年の三月から一〇月にかけてヨーロッパ二か国とアメリカ、カナダをまわっています。この途中、六月にはイギリスでエリザベス二世の戴冠式に裕仁の名代として出席しています。明仁はこれ以降「皇室外交」と言われるものを始めていくことになりました。

それから、一九八一年からは新年一般参賀で「おことば」を言うようになりました。一般参賀はいつから始まったのかははっきりは調べられませんでした。

Xデー状況と「自粛」

いよいよXデーの状況に入っていきます。天皇在位六〇年というのが一九八六年にあります。政府の式典は四月二十九日。これは裕仁の誕生日です。それから民間の主催の「天皇在位奉祝の集い」というのが、一月一三日にあります。この年は東京サミットがあつた年でもあります。在位六〇年についての「奉祝」反対運動も行われました。そして、一九八七年四月二十九日の天皇誕生日の宴席で嘔吐、そのあたりから具合が徐々に悪くなって行って、九月に手術をします。裕仁の念願だった沖縄行き、「海邦国体」の開会式に出席できなくなりました。沖縄での国体は、知花さんが「日の丸」を焼いた事件がおき、その後裁判になっています。天皇としては初めての外科手術をした。「玉体にメスを入れる」ということで、それ自体も問題になったぐらいのものでした。それです。実際にはガン状態は残ったままなわけですが、発表されずにいました。そして翌年の八八年一月には一般参賀に出してきました。

その年の八月一五日には、全国戦没者追悼式に出席しました。これが公の場に出る最後になりました。九月一九日に大量の吐血をして、これより死ぬまで、マスコミを中心とした異常な状況に突入していきます。九月一七日よりソウルオリンピックが開催されましたが、その報道も隅においやられ、いわゆる「自粛」騒動が加熱していきます。

そして、ついに一九八九年一月七日に死去しました。同時にアキヒトが即位、「平成」に元号が変わりました。九日には「朝見の儀」が行われて、二月二四日に「大喪の礼」が行われました。この日は「昭和天皇の大喪の礼の行われる日を休日とする法律」という法律で休日になりました。

この年の八月二十六日に礼宮（秋篠宮）が川嶋紀子との婚約を発表します。このあたりのことは、『情報支配』のなかで加納実紀代さんがいろいろ書かれていますので、その視点からみていきたいと思います。加納さんも書かれています。あのカワシマキコという「普通」の女の子が「ミヤサマ」と「普通」の恋愛をして「3LDKのプリンセス」になったというストーリーでマスコミを賑わせているけれど、「あれはけっこうしたたか目立ちたがりじゃないか」。それは本当にそう思います。全然普通じゃない。普通の恋愛っていったって、普通にみせるためにサークルをつくったり、そこでの活動にかこつけてやってるだけで、すべて計算されたものだと思います。ここで加納さんが重要な指摘をされています。

「今回の礼宮・紀子の結婚は、私は『三点セット』だと思ってるんです。つまり浩宮の結婚と秋の『即位式』『大嘗祭』、この二つがどうももう一つ大衆的なアピール力が弱い。そこで『即位式』のプレ・イベントとして礼宮の結婚を先に持ってきた」。

裕仁が死んで、世の中的には沈んだムードになっている。今までものすごい情報量がずっと垂れ流されていたのが、ある程度一段落して、日常に戻って、皇室への関心が少し薄れてきたところで礼宮の婚約が発表される。それをマスコミが過剰に盛り上げることによって、皇室へ関心が向く。で、今度は実はオメデタイ話だ。だからみんなの気分が浮き立つ。そういうふうな効果を狙ったことだろうというふうに、理解できます。支配者の「平成は明るくスタートしたい」というような気持が加納さんのおっしゃる『三点セット』、「即位式」「大嘗祭」を盛り上げる

ための前段として礼宮の婚約、ということになるのだと思います。

この年の一二月に、『情報支配』の元になった集会、「（象徴天皇制を問う）全国フォーラム」が開かれています。

翌年、一九九〇年の一月一八日に、本島長崎市長銃撃事件がおきました。裕仁に戦争責任があったという発言（発言は八八年一二月）に対して右翼から脅迫されましたが、発言を撤回せず、銃撃され重症をおつた。このことについてはテキストで酒井武史さんが発言されていますが、最後に追記として掲載されている部分で、本島さん自身は自民党の人ですが、その人がこういう発言をしたということで、「だが体制側の人間で、そのことをはっきり口にしたのは本島さんだけだった。タブーを破つたのは本島さんだけだった。だから右翼にとって許せなかったのである」とのことです。このことが、その後のマスコミや言論出版に与えた影響は大きかったと思います。

一月一〇日には「即位の礼」、一月二二、二三日と「大嘗祭」が行われます。「大喪」もそうでしたが、これも「国事行為」と皇室儀式がイレコになって行われます。資料に出しておきましたが、ほぼ一年かけて「代替わり」の儀式をやるんですね。詳しい内容についてははぶきますが、ここにも政教分離違反がみられます。

メディアによるすりこみと横並び

さて、ながながと時系列に出来事をみてきました。やつと今日の講座の中心テーマに入りますけど、Xデー前後の「自粛」や記帳などの騒動についてももう少し考えてみたいと思います。まずはテレビや新聞の大量の下血報道、毎日出血量や脈拍数なんかを報道していました。政治家が

外遊するのを辞めた、そういうかたちでいわゆる「自肅」が始まってきた。国会議員が皇居に記帳に行き、それを報道することで一般に広がっていきました。『情報支配』で栗原彬さんは「日常的な天皇情報」のインプリンティング（すりこみ）」と言っています。「都合の悪いところについては徹底的にタブー化して、都合の良いところについては選択して、むしろ日常的にすりこみをやる」。アナウンサーが黒っぽい服で放送していると、「なんだ？」と思う。その「なんだ？」がタブーのすりこみになっているのです。それから、金塚さんの発言のなかで、「マス・メディアのひとつの機能として各家庭、個人の家をそれぞれ天安門広場にする、あるいは皇居前広場にしよう……」というところがあります。また「子どもたちにも大人にもみられる『一緒願望』を増幅するために皇室を開いて、その『一緒願望』の中心に天皇をすえる」形でメディアが動いている、と言っています。自肅は自治体、教育現場、神社本庁を通じて庶民のなかに入り込んできた。企業も自肅、デパートや観光地などにもひろがると、小さな商店街、個人商店にまで波及します。ここまできると、横並びの精神、金塚さんのいう「一緒願望」です。一人突出できない。実際、右翼の妨害は小さいレベルではたくさんあったようです。大きなのはさきほど紹介した本島さんの事件ですね。やはり右翼は悪い。そして、この状態は予定より長かった。一一一日に及びます。

支配者やマスコミはそれぞれ来るXデーについて、七〇年代から準備を始めていたと言われています。おそらく在位六〇年ころからは本格的に新聞の予定稿や「昭和総括ビデオ」の準備もしていたと思います。だけど、ここまでインテリバルがあるとはあまり予想していなかった。だから、実際に皇居前に張り込んでいた記者たちの苦勞はたいへん

なものだったようです。それは『天皇の門番——皇居周辺に張りついた新聞記者69人の111日』（読売新聞「張り番の会」編、JICC出版局、一九八九年）という本に、記者たちのほやきがまつています。それと同時に、あまりの自肅報道に、見ている側はウンザリした気分がどんどん増幅していった。そしてそれは批判につながり、政府も当時の小渕官房長官が「国民の日常的な社会、経済生活に著しい支障が出ることには、いかなるものか。常々、国民のことを考えておられる陛下のお心に沿うものではない」と発言したりしました。明仁も同じような発言をした。これこそ、天皇制だと思える言葉ですね。「陛下のために自肅を自肅しよう」という。このウンザリ感がXデーの反対行動に与えた影響も大きかったように聞いています。このあたりは、討論の場でも当事者に聞いていただければと思います。

「大喪の礼」「即位の礼」「大嘗祭」はご存知のように神道儀式（皇室の儀式）と憲法にある天皇の国事行為、それと国が主催する行事がごつた煮のようになっていくセレモニーです。この問題は、実際には憲法違反だと思えますが、そのギリギリの線を彼らはかなり真剣に模索したと思います。その結果は、どう考えてもかなりおかしなものになった。外人からみたら、変なものだったでしょうね。こういう見せたり隠したりする様子がテレビに映しだされて、かえって神秘的なもの、「伝統的」といわれるものへのあこがれやシンパシーを感じさせる要因にもなっていると思います。

そして、報道。テレビや新聞の報道そのものとしては、「崩御」ということばや最高敬語をめぐった議論がその後たくさん出てきました。その紆余曲折、反省、などをまとめたものもたくさん出ています。今回私が参考にしたのは、「法学セミナー増刊号」の『検証・天皇報道』（自由

人権協会マスメディア小委員会、一九八九年)です。このなかでは『情報支配』にも登場している酒井武史さんが、菊のタブー^①について書かれています。テキストのなかで少し触れている敬語の問題が、もう少し詳しく解説されています。各新聞社の横並び感覚、これも一緒願望のひとつと思いますが、そういった状況や、たとえばそういうことに異議を唱える記者、主張があつて論議されても、結局その横並びにしておけば恐くない、といった意識に集約されていってしまった。「このときにせめて皇室敬語だけでもとばらつておいてくれたら、その後の天皇報道の在り方もかなり変わったはずです。それはやろうと思えばできたはずです」。これ以降の今の状況を考えると、本当にこのときにやつておいてくれれば、と実に思います。

この各紙の横並び感覚は敬語問題だけではなくて、「戦争責任」や「昭和の総括」といったものも実に横並びでした。『情報支配』の資料に各紙社説が掲載されています。それぞれ、天皇死去、新天皇即位、護憲発言、大喪の礼、記者会見の項にまとめられて、冒頭に解説がついていてそれぞれの特徴が記されています。

裕仁は、戦後の権力者にとつて使いにくい天皇だったのでないか。戦争責任問題はごまかしているし、外国にも出られない。アキヒト・美智子が作りはじめて「開かれた皇室」、「クリーン」なイメージで、平和天皇の外交をしたいのに、なかなか裕仁が死ななかつた。さあ、やっとこれで新しい大衆天皇制、新しいタイプの象徴天皇制を押し出せる、というところに、この社説やそれに即した報道がされたように思います。天皇のイメージというものについては、テキストで柏木博さんが明治天皇のところから解説していらつしゃいます。裕仁については、「若く美しい国際派の皇太子↓強い軍人のイメージ↓家族写真を撮るような

普通の家庭↓仲睦まじい老夫婦」。栗原さんが少し触れられている調査の報告が『記録・天皇の死』(筑摩書房)という本に詳しくあるのですが、それから読みとれる裕仁のイメージは、まったくこの図式にはまっていると思います。また、明仁については「核家庭的家庭生活、戦後のアメリカン・ウェイ・オブ・ライフを実践している家族、そしてテレビメディア(電子映像)の天皇」というふうに言っています。こういうイメージはもちろん裕仁・明仁の個人のキャラクターがないとは言わないけど、それとはあまり関係なく作られているものだと思うし、それを定着させるためにマスコミの「横並び意識」も含めて利用し、またマスコミはそれに乗ってはしゃぎ、喜んで利用されているフシがあると思います。これが今の天皇制だと思います。今の天皇記者会見や三大行事、また私的な行動をも映像にしてながしていく。とことんテレビを利用し、またテレビもそれをネタにできています。

メディア状況の変化の中で

本当は、「民主主義」という名の天皇制、天皇は一体なにをする人ぞ、ということをお話さなきゃいけないんですけど、こうやつてみると、おおよそ私が思っている民主主義とはかけ離れたものなんです。私が思う天皇、天皇制というのは、時の権力者のイメージ通りにうごく、神がかったへんな生き物です。そういうへんな生き物はほかにもたくさんいるので、それ自体は否定しませんが、国や権力者がそれを利用して、国の象徴と称して私たちのうえにかぶさってくるのには、やはり抵抗がある。

二〇年前はテレビ時代が終わりとつあるときでした。それでも「お茶

の間」を皇居や記帳所、葬儀の場へと連れて行き、多くの人がその渦に巻き込まれていった。そういう意味ではテレビ時代のピークだったと思います。あれから二〇年、情報化社会というのは多様化していき、インターネット、携帯電話、テレビの多チャンネル化、さまざまな情報があふれています。あのととき上からの指示でただ張り番をしていた記者たちがそろそろ企業のなかで中堅から上の方になっていると思います。次のXデーのときにマスコミはあの当時の議論がまたできるだろうか。あの時の反省や後悔が生きていることはあるだろうか、と思うと、暗い気分になります。

(なかむらななこ)

